

氏名	豊田 圭子
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 5010 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則 (文部省令) 第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	動詞ヤルの意味用法についての歴史的研究
学位論文審査委員	主査・教授 江口 泰生 教授 宮崎 和人 准教授 京 健治 教授 田仲 洋己

学位論文内容の要旨

序論、本論、結論の三部仕立てである。原稿用紙に換算して 550 枚程度の分量をもつ力作である。

目次は以下のとおり。

序論

本論

第 1 章 ヤルの意味・用法の展開

第 2 章 ヤルの機能動詞化

第 3 章 テヤルの意味・用法の展開

第 4 章 ヤラレル・ヤラレタの用法の史的変遷

結論

参考文献

序論においてヤル動詞の先行研究を網羅し要約した。さらに動詞が文法化したり機能動詞化する論文も要約した。

本論の第 1 章「ヤルの意味・用法の展開」ではヤル動詞の意味・用法の変遷を詳細に記述した。

I 段階では、ヤルは対象物の移動を表す。補語に「人」「物」「車」などの具体名詞をとる。出現時期は 700 年代～900 年代である。

II 段階では、ヤルは物事の進行を表す。補語に「理」「はか」などの動作性を持たない抽象名詞をとり「物事を進行させる・おし進める」意を表す。出現時期は 1400 年代である。補語が抽象名詞になったことが前段階と異なる点である。また、II 段階のヤルは「主体の意志で、思いどおりに物事をおしすすめる」意を表す。

III 段階では、ヤルは主体の態度・能力の表出を表す。補語に「味」「盛」などの動作性をもたない抽象名詞をとる。この段階で、物事に対してではなく「人の振る舞い・態度・能力」に対して用いられるようになった。II 段階での「主体の思いどおりに」という意味が残っている。出現時期は 1600 年代である。

IV 段階では、「騒動」「大騒ぎ」などの動作名詞を補語にとり、この段階になって、ヤル

はスルと類する用法を出現させる。その一方、補語には「問題事・通常ではないこと」という制限がある。出現時期は1700年代である。

V段階では、ヤルは抽象的な事柄を述べることを表す。具体的には、「やる所までやる」「何でも一心不乱にやる」など「限界まで何かを行う」意を表す。

第2章「ヤルの機能動詞化」ではヤル動詞がどのように意味を希薄化させているかについて論じた。ヤル動詞が古くは事物の移動→物事の進行→内面の表出、といった起点着点、起点進行、起点表出といった「動き」を伴うものであったが、動きを失い、動作名詞を受けて動作の実質内容を補語が表すようになり、ヤル動詞そのものは意味が希薄化し、スルに近い用法を獲得しはじめた。ただし当初は補語に「問題事」という限定のあるタイプであったが、次第に自由に補語を接続できるようになっていった。その過程について実証的に論じ、ヤルがどのような機能動詞のタイプになるのかを考察した。スルが無意図的な補語も接続する（くしゃみをする）のに対し、ヤルは意図的なものでないと接続しにくいという差異もあり、現在に至るまで完全にスルと一致しているわけではないことも確認した。

第3章「テヤルの意味用法の展開」は以下について述べる。

古く「動詞+テヤル」は動作をして送り届けるという意味で用いられていた。ヤルの古い意味を保存していたわけである。その後、次のような段階を経て、恩恵表現へと変貌を遂げていった。

- I 動作が相手に直接に及び、恩恵を与える。（「教えてやる」など）1600年代以降。もっぱら他動詞が用いられる。もっぱら相手に影響が及ぶ他動詞が用いられる。
- II 動作が相手に直接に及び、非恩恵を与える。（「だましてやる」など）1600年代
- III 動作が相手に直接に影響せず、主体が一人で行う動作であり、決意表明を表わす。（「飲んでやる」など）。1800年代以降。自分が一人で行える他動詞。
- IV 動作が相手に直接に影響せず、主体が一人で一般的に好ましくない動作を行うことを表わす。（「死んでやる」など）1900年代以降。無意志的な自動詞が用いられ、意志的に行うという意味となる。

第4章「ヤラレル・ヤラレタの用法の史的展開」については以下のとおり。

ヤラレル/ヤラレタの用法を次の3段階に分ける。

- I 段階 ヤル（おくる）に対応するヤラレル 被害を表さない
- II 段階 ヤル（おし進める）に対応するヤラレル 被害を表さない
- III 段階 被害を表すヤラレル

I 段階は、主に尊敬の意で用いられる。「派遣する・与える」などの意味であるヤルに対応する形式である。II 段階は1400年代に出現した「おし進める」意に対応する。1600年代に出現する。III 段階は、「人+ヤラレル」「身体部位+ヤラレル」などの形式で、被害を表す。この段階では対応する能動文をもたない。また、受動文「人ガヤラレル」に対応する「人ヲヤル」という能動文は、受動文よりもあとに出現する。以上のことから、ヤラレルはヤルの用法の変遷とは別に、被害を表す形式として独自に用法を発展させたと考えられている。

最後に以上述べたことを結論としてまとめ、末尾に参考文献をつける。

学位論文審査結果の要旨

豊田圭子の博士論文「動詞ヤルの意味用法についての歴史的研究」の審査会は2月21日（金曜）6時より2-6セミナー室で開催した。審査委員は主査江口泰生、現代日本語研究の宮崎和人教授、日本語文法史の京健治准教授と、用例に日本文学作品を多く対象としているので、日本文学の田仲洋己教授に参加、合計4人で審査にあたった。

最初に各章と発表済み論文との関係を説明してもらった。第1章が2012年6月「動詞「ヤル」の意味用法の展開—上代から中世にかけて—」（『筑紫日本語研究2011』）と2012年11月「動詞「ヤル」の意味・用法の変遷」（『2012年度日本語学会秋季大会（富山大学）予稿集』）、第3章が2013年3月「テヤルの変遷」（『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第35号）、第4章が2014年3月「「ヤラレル／ヤラレタの意味用法の史的変遷」（『国文論稿』42）をもとにしての博士論文である。

序論、本論、結論あわせて原稿用紙に換算して550枚程度の分量をもつ力作であること、18580例もの用例を収集し、それに一つ一つ検討を加えており、たいへんな労力であったと推察された。ヤル動詞が抱える問題点もほぼ網羅されている。実証的に論証をすすめる態度は高く評価された。

次に論文の概要を説明してもらった。まとめると以下のようになる。

ヤルという動詞は古くは「AをBに送る」の意味で使用されてきた。

あぶり干す 人もあれやも 濡れ衣を 家には遣らな 旅のしるしに 万葉集
1688

ところが現代語ではその意味以外にも「ばりばり仕事をヤル」のようにスルの意味でも用いられ、「酒煙草をヤル」のように「嗜む」の代わりに用いられ、大変用法の多い動詞である。ヤルという動詞はこのように多くの意味を持ち、使用頻度の高い動詞である。

スルと相互に入れ替えが可能な点には大塚望2002「「する」と「やる」（『日本語科学』12）をはじめとする多くの先行研究があり、次のことが明らかにされている。仕事をスル～仕事をヤルの場合、ヤルのほうが意図的であり俗語的である、「くしゃみをスル」は可能だが「くしゃみをヤル」は成り立たず、ヤルは意図的な動作にしか用いられにくい、といった先行研究である。またヤルが動詞+テヤルの形式になって「教えテヤル」「死んデヤル」のように恩恵・非恩恵の意味を表す用法が指摘されている。

このようにヤルは用例も多く用法も多岐にわたるが、どのようにしてそうした意味や用法が成立したのかという歴史的な面についてはあまり研究されてこなかった。その理由としては、ヤルの用例が莫大であり考察が大変であることもあるが、むしろスルとの相違、恩恵表現テヤルの成立（松下大三郎1974『改撰標準日本語文法』）、ヤル・クレル・モラウなど授受表現の考察（荻野千砂子2007「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』3-3など）などに力が注がれていて、肝心のヤル動詞そのものの意味や用法そのものについての考察が疎かになっていたからだと考えられる。

こうした反省から本論文ではヤルそのものの意味・用法を明らかにし（第1章 ヤルの意味・用法の展開）、その結果、村木新次郎1991『日本語動詞の諸相』の主張する「機能動詞」についてもスル型やアツメル型などに分類し、再検討をくわえ（第2章 ヤルの機能動詞化）、テヤルの成立（第3章 テヤルの意味用法の展開）、ヤラレル（タ）の用法（第4章 ヤラレル／ヤラレタの用法の史的展開）の考察を行ったものである。こうした用法の成立に決定的であったのは、ヤル動詞が中世後半に「主体の思うままに物事を進める」という意味を獲得したことであったと関連づけ、ヤル動詞の意志性、テヤルの恩恵表現、ヤラレタの被害用法も、ヤル動詞の移動用法に「主体の思うままに物事を進める」という意味が加わったことから生じた結論づけた。

前述のとおりヤル動詞そのものの意味変遷を考察しようという先行研究はあまり見当た

らず、こうした重要な問題を見つけ出した点、非常に評価できる。導き出された結論も今後検証が行われるだろうが、重要な提言になるものと思われ、本論文の出現によって議論が活性化すると思われる。

以上から本論文の価値は次のとおりに認められる。

(1) まず以下の諸点を明らかにし、結論が学説として妥当性を有することである。

ヤルが実質的意味を希薄化させ、スルと同じような機能動詞へ変化していく過程

テヤルのような文法形式への変化の過程

ヤラレタのような被害をあらわす形式への変化の過程

(2) 方法や手順が具体的、かつ多数の用例に基づき、実証に貫かれていることである。

(3) ヤル動詞が抱える問題点が網羅されていることである。

問題点もないわけではない。第1章が他の章と比較して分量が多くアンバランスで、ヤルの意味用法以外に待遇性の問題や評価的感情表現など、独立させて論ずべき点や、他の問題と関連づけて論ずべき点が混沌としている場合がある。第1章は将来的にはいくつかのテーマに分割して、それぞれを論文として仕上げていくという手もあるだろう。逆に第2章がやや考察が貧弱である点など、うまく構成されていない箇所もある。それらは今後の課題とするにしても、第1章が意味用法の変遷の全体像を描き、第2章以下で、スルの意味の出現、補助動詞テヤル、被害の意味のヤラレタ、といったテーマで構成されており、ヤルという動詞に関する問題点をほぼ網羅し、まとめていると評価された。

考察手順については、先行研究についても余すところなく取り上げられている。そればかりでなく、関連領域の論文も読み、その概要をまとめている点は高く評価されたが、個々の論文の要約にとどまり、本論文との関係性についてももう少し述べるべきだったと思われる。

議論が集中したのはヤルと対比した「機能動詞」として挙げられている動詞が雑多であり、これは先行研究自体にも問題があるが、先行研究にやや安易に依存しすぎであったせいかもしれない。この点は今後、「機能動詞」なるものを一度解体し改めて考察する必要があるだろう。

内省のきかない場合にどのように意味が抽象化したことを証明すれば良いのかという方法論への質疑もなされた。これは本論文だけでなく、歴史研究が抱える問題点でもあるが、用例を収集しその特徴から論じていくという本論文が採用する方法がもっとも穏当な方法であろう。他にも資料の年代がおかしい点、動詞の意味と統語論上の用語が混乱している記述などが指摘されたので修正の必要がある。

テヤルが恩恵の意味を獲得する際の筋道としては本論文が主張するように「主体の思うままに物事を進める」という意味以外でも、「物品を贈ることがすなわち相手にとって利益になるのだからそこから恩恵の意味が生ずる」という筋道もありうるが、それについてはどう考えるのかという疑問もあった。テヤルには初期の段階から「だましテヤル」のように非恩恵の用法もあり、また無意図的な動詞に付いて「死んデヤル」のように意志的な意味を獲得する用法も出現するので、「授与が恩恵になる」というだけではテヤルの意味用法を説明できるわけではないが、そのあたりの主張は本論文において十分になされているとは言い難い点も惜しまれる。もっと主張すべき点は主張すべきであるという論証スタイルへの注文もあった。

審査は大変活発に行われ、さまざまな意見が提出された。しかし審査員全員が本学位論文の実証的な手法、テーマの重要性、実際の言語事実を基にして考察する態度を好意的にかつ高く評価した。また導かれた結論も学説として十分に首肯すべき点があった。

以上の審査の結果、博士（文学）の学位を認定することについて全員一致で合意した。